目黑

分限帳にも白銀村あり、江戸砂子、村有凡八百石程の高なりと云々、

〔新編江戸志七下〕目黑　大崎

目黑は往古よりの名にして、北條分限帳にもあり、永祿元龜の比の繪圖にも見へたり、上中下三ケ村有りと也、

〔御府內備考一百五目黑〕目黑は今も上目黑村、中目黑村、下目黑村と分れて、廣き地名なり、〇中略目黑町と稱せる處は、永峯町續より、瀧泉寺脇通り不動の門前までにして、全く不動への道筋なれば、往來も多かりしゆへ、町に開きしものと見へたり、

麻布

〔江戸砂子五上〕麻布又阿左布と書　平尾

麻生〃又麻布本名淺生村　龍土　櫻田　谷町　市兵衞町　六本木　上ノ町　雜色　これらいづれも所の小名也、麻布七村といふ、麻布は矢盛庄七鄕の內にて、古き名也、麻布七村といふは、近き事にや、いぶかし、

〔新編江戸志七下〕麻布　阿在布共　又麻生共

麻布の號は、此所多摩川より近きゆへ、此所にて往古は麻など多く植置き、布など織出せるよりの名ならん、多摩郡にも布多村と云有と、手調布など多く在なり、織出るよし、參考太平記に武藏野合戰の條下に、兒玉黨淺羽、毛利家本作二淺生一四方田庄櫻井と書、いづれも武藏の住人なれば、麻生とあるは此麻布なるべし、

〔御府內備考七十五麻布〕江戸志云、此所は多摩川へもほど遠からざれば、古へこの地に麻を多くうへおき、布をもおり出せるよりの名ならん、多摩郡にも布多村といふあり、手調布を多くおり出せしよし、又或人云、あさふは麻布にはあらず、此邊昔は山畠にて麻を作りしゆへ、麻田をあさふとよめり、日本紀にも、豆田粟田をまめふあはふと訓ずるがごとく、此外にも蓬生又淺茅生の類に、